

## 令和2年度 奈良市立帯解こども園 研究実践概要

園長名 大西 三千代  
全園児数 128名

1. 研究主題 「豊かな心を持ち、意欲的に活動する子どもの育成を目指して」  
～子どもの心の動きを捉えた、遊び込める環境構成と援助～

2. 研究年度 3年度

### 3. 研究主題設定理由

日々の遊びの中で、「やってみたい」「おもしろい」と思って遊ぼうとするが、遊びが続かない子どもの姿が見られる。そこで、子どものしぐさ・表情・言葉から何に興味を持ち、心を動かされたのかを深く探り、援助や環境構成を行うことにより、子どもが主体的にヒトやモノ・コトと関わって遊び、新たに創り出し展開しながら遊び込む中で、心を動かされる経験を積み重ねていくことが重要だと考え、この主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

子どもが「やってみたい 楽しい おもしろい」と思い、遊び込むことができるような保育者の援助や環境構成について考える。

#### ②研究の重点

- ・研究主題について、職員相互の共通理解を図り、具体的な取り組みの方法を探る。
- ・意欲的に生活や遊びを進めるために、子どものしぐさ・表情・言葉から心が動いた瞬間を見取り、それに応じた環境構成と援助のあり方を探求する。

#### ③活動の方法

( 環境構成 援助 心が動いた子どもの姿 心が動いた瞬間やきっかけ)

【0歳児】12月 「パンッ!!」 A児(1歳7か月)

ねらい：保育者と一緒に、したい遊びを十分楽しむ。

A児は、室内で保育者と一緒にキャッチボール(保育者が投げたボールを両手でキャッチする遊び)を繰り返し楽しんでいましたが、他のことが気になり、別の場所へ行こうとする。保育者は、引き続きボール遊びを楽しんでほしいと思い「Aくん、見てー。ポンポンポン」と、バスケットボールのようにボールをドリブルして見せる。それを見たA児は、小走りで戻り保育者のボールを取ると、同じようにドリブルをしようと片手や両手で何度も叩き始める。その様子を見守りながら「ポンポンポン上手だね!できるかな?」と声を掛ける。ボールは跳ねずに転がっていき、A児は追いかけながら叩こうとし、勢い余って何度も転びそうになる。そこで、保育者がボールを受け取り、キャッチできるようにA児にボールを投げる。A児は保育者が投げたボールを叩こうと、右手を振り下ろす。その姿を見て、保育者が高さを調節しながら投げる。A児は、再び手を振り下ろし、ボールが手に当たると嬉しそうに笑顔で保育者の方を見る。「やった!当たったね!嬉しいね!」と喜びに共感する。A児は、その後も保育者の持つボールをじっと見つめ、投げられると真剣な表情でボールを目で追い、近くに来た時に手を振り下ろすことを数回繰り返す。そのうちに、タイミングが合い、手にパチン!と当たり、床にもパンッ!!と音が鳴って、勢いよくボールが跳ねる。A児は、「あはははははあっ!」と大きな声を出し、顔をクシャッとさせて笑う。保育者も「おお!パンッって音鳴ったね!跳んでいったね!面白いね!」と一緒に笑い、面白さや喜びに共感する。その後も、ボールを繰り返し叩こうとし、タイミングが合わない時は真剣な表情で次のボールを待ち、タイミングよく手に当たり音がすると全身に力を入れて大きな声で笑う。

#### <評価>

- ・保育者がドリブルをして見せたことで、ボールを叩いて跳ねさせるということに興味を持ち、保育者の真似をしてやってみようとする姿につながった。
- ・保育者が投げたボールをA児が叩こうとするのを見て、叩きやすい高さでボールを投げるようにしたことで、ボールを叩きたいというA児の思いを満たすことができた。
- ・保育者もボールの高さを調節しながら真剣に投げたり、手に当たったときに喜んだり、一緒に遊びを楽しみ、気持ちに共感したことで、何度も繰り返し遊ぶ姿につながり、十分遊びを楽しむことができたのではないかと。

【1歳児】9月 「なくなっちゃった!」 A児(1歳9ヶ月)

ねらい：水遊びや感触遊びをして、いろいろな感触に触れながら遊ぶ。

砂場にいくつか水溜まりを作り、初めての泥遊びをした。片栗粉や寒天などの感触遊びが苦手なA児は、少し離れたところから友達や保育者が遊ぶ様子を見ている。保育者は「Aくん、こっちでお砂して遊ぶ？」と砂場の端に誘って一緒に砂遊びをした。A児が砂遊びを楽しみ始めると、保育者がバケツに入れた水を近くに置き、その水を使って遊べるようにした。水をスコップですくったり、砂に混ぜて泥を作ったりしながら遊んでいるうちに、A児は泥を手で触ってみようとする姿があった。A児は砂場の端で遊びながら周りの友達や保育者が水溜まりで遊ぶ様子を見て、水溜まりに自分から近付いた。水溜まりに足を少し踏み入れると、保育者に視線を向けて笑みを浮かべた。保育者は「お水冷たいなあ」とA児に声を掛けた。しばらく足で水溜まりの底の泥の感触を楽しむと、次は手を水溜まりに入れて泥を掴んだ。手のひらを広げても泥が手に残っているのを見て、A児は手の泥を振り払い始めた。その様子を見た保育者は「Aくん、おてて出してごらん」と言い、B児が持っていたホースを借りてA児の手に水を掛けた。A児は綺麗になった手を見て「わあ！」と言い、保育者に笑顔を見せた。A児はもう一度水溜まりから泥をすくい、その手を保育者に差し出した。保育者が「もう一回？」と聞くとA児は「うん！」と答える。A児は泥をつかんだ手をB児が持つホースに近づけた。水が掛かって手から泥がなくなると、A児はまた「わあ〜！」と笑顔を見せ、その後A児は何度も同じ動きを繰り返した。

<評価>

- ・A児の感触遊びが苦手だという姿を保育者が捉えていたことで、砂遊びから徐々に泥遊びへと誘うことができた。また、泥が手に付いた感覚が苦手だというA児の思いに気づき、ホースの水で泥を流したことがA児の次の遊びに繋がるきっかけになった。子どもの姿を捉え、その子どもに寄り添う援助や関わりが、「やってみたい」「楽しい」という気持ちに繋がった。

【2歳児】12月 「おっきいのつくりたい！」

ねらい：自分なりのイメージをもって遊ぶ。友達と関わって遊ぶことを楽しむ。

A児は、レゴブロックを黙々と積み上げ、消防車をつくらしている。何度崩れてもつくり直し、A児の目の高さまで高くなったところで「おっきいのできた！」とそーっと消防車を走らせて遊ぶ。集中して遊んでいる様子を見守りながら、①「大きい消防車できたね！格好いいね！」と、A児が頑張っつった姿を認める。A児は、目を輝かせもっと高くしようとレゴブロックを積み上げていく。だんだん高く積みあがっていく様子を見て、①「すごい！高くなってきたね！」と認める。A児が腕を伸ばしてもブロックの先まで届かなくなり、「先生できへん」と保育者に助けを求めた。A児の高くしたい思いを受け止め、①「先生もお手伝いするね」と、レゴブロックを一つ積み上げる。その様子を近くで見ていたB児が「B、やったるか？」とレゴブロックを一つもち、一生懸命に腕を伸ばし一つ積み上げようとする。保育者は、A児にB児が手伝ってくれることを伝えると、A児は「うん」と不安そうな表情でB児の様子を見ている。B児「いけたで！」と積み上げたことを喜ぶと、A児はほっと笑顔になる。①「やったー！また一つ高くなったね！」と一緒に高くなったことを喜んで、C児「Cもできるで」、D児「Dちゃんもする」とやってきた。A児に①「CくんもDちゃんもお手伝いに来てくれたよ」と友達の思いを知らせると、A児「してー」と心細く呟き、二人の様子を見守っている。C児は、容易くレゴブロックを一つ積み上げた。D児は、積み上げようと腕を伸ばすが、ブロックの先まで届かなかった。消防車の高さはC児が腕を伸ばすとぎりぎりの高さになっていた。C児がもう一つレゴブロックをもち、慎重に積み上げようとする。A、B、D児は、その様子をまじまじと見つめ、ブロックが倒れてこないか、ドキドキしながらC児の姿を見つめている。積みあがるとA児「やったー！」B児「うわー！」とつぶやいている。①「やったね！また高くなったね」と積みあがったことを一緒に喜び、A児に①「Cくんにも手伝ってもらえてよかったね」と友達と一緒に、消防車がどんどん高くなっていく嬉しさを伝える。C児がもう一つブロックを積み上げようと思いつき腕を伸ばし、ブロックの先に触れた途端、積み上げていたレゴブロックが崩れ落ちてしまった。A、B児は「あ〜あ〜」と悲しみ、C、D児は「うわあ〜！」と崩れたことに興奮している。①「あー壊れちゃった。高いところまで頑張っつったのにね」と言葉にしなが、散らばったレゴブロックを集める。A児が「もう一回つくろう」と笑顔で言うと、B、C、D児は床に散らばったレゴブロックを集め、4人でもう一度つくり直し始めた。

<評価>

- ・普段はうまくいかないことがあるとすぐに諦めて保育者を頼るA児だが、何度崩れても自分で根気強く消防車をつくり直していたため、その様子を見守りできたときには頑張った姿を大いに認めた。高い消防車をつくりたいというA児なりのイメージがあったことが遊び込む姿に繋がったと考えられる。
- ・A児のしたい遊びの中で、友達との関わりをもって遊んでほしい思いがあったため、A児の思いと友達の思いを繋げられるよう、A児に丁寧に伝えることを心がけた。友達の思いを知れたことで、A児と一緒に消防車を高くしようとするB、C、D児の姿を受け入れることができたと感じる。高く積み上げた消防車が崩れた後も、悲しい気持ちをすぐに切り替えて「もう1回つくろう」と友達へ伝え笑顔でつくり直しはじめたことから、友達と関わって遊ぶことへの楽しさを感じられたと思う。

【3歳児】10月 「ドングリはいった」

ねらい：身近な自然物に触れて遊ぶ。友達と一緒に楽しんで色々な遊びをする。

保育室でかたむけて置いた机からたくさんドングリを転がして遊んでいたが遊ぶ子どもが少なくなっていた。机に転がすだけでなく、机と牛乳パックのコースを組み合わせることで、自分たちでコースを作りながらももっとドングリ転がしを楽しめるように、もう一つ机をつけてビー玉転がしのコース作りで使っていた牛乳パックと洗濯バサミを置いておいた。

A児が置いてある牛乳パックに気付き、牛乳パックを長くつなげてななめになっている机に転がるようにコースを作った。「転がしたらどうなるかな。」と声を掛けると、A児が牛乳パックのコースからドングリを一つ転がした。ドングリは牛乳パックのコースを転がり、机の上も音を立てて転がっていった。「下まで転がった」と保育者の方を見て嬉しそうにする。「すごいね。先生も転がしてみたい？」と一緒に転がして「下まで転がるね」と話しながら遊ぶ。その様子に興味を持ち、B児とC児が「いれて」と遊びに加わり、3人でドングリを転がしていく。ドングリを全て転がし終わると、3人は机の下に転がっているドングリを集め始めた。A児とC児が少し集めたドングリを牛乳パックのコースから転がし始めると、まだ机の下でドングリを集めていたB児が机からドングリが転がってくるのを見て、転がってくるドングリを手で取ろうとした。ドングリが速くて何度か取ろうとするが上手く取ることができなかった。するとB児は近くにあったコース作りのための半分に切った牛乳パックを手を持ちもう一度机の下でドングリが転がってくるのを待ち、転がってくるドングリを牛乳パックを動かして取ろうとするとポンッと音を鳴らして、ドングリが牛乳パックの中に入った。「入った」と喜ぶB児に「すごい入ったね」と保育者も一緒に喜ぶ。ドングリを転がしていたC児が「Cもやりたい」と言うが、同じような牛乳パックが無かったので、C児と新しい牛乳パックを探しに行き、牛乳パックを切って渡すと、C児はB児と一緒に転がってくるドングリを牛乳パックで取って遊び始めた。B児とC児は、牛乳パックいっぱいドングリをキャッチし「いっぱいとれた」と見せ合う。A児が「Aもやりたい」と言うと、C児が「次Cが転がすわ」と牛乳パックをA児に渡してドングリを転がし、その後も交代しながら繰り返し遊んでいた。

<評価>

- ・机からドングリを一度にたくさん転がして遊んでいたが、遊ぶうちに転がすだけだと物足りなさを感じている姿があった。違う楽しみ方が出来るように牛乳パックのコースを用意することで、コースを作ってドングリ転がしを楽しむようになり、遊びの中から、ドングリをキャッチするという遊びに展開していった。
- ・C児がやりたいと言った時に、同じ遊び方で一緒に遊べるように、もう1つ牛乳パックを探しにいきすぐに切って用意した事で、友達と「いっぱいとれた」と見せ合ったり、関わる機会になり、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことへとつなげることができた。

【4歳児】11～12月 「ロールケーキ屋さんしよう。」(お店やさんごっこを通して)

ねらい：自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら遊びを楽しむ。

スポンジを丸めてドングリや色つきポンドでデコレーションすると「ロールケーキみたい。」「今度はイチゴのクリーム作る。」と次々に作って並べることを楽しんでた。プラスチック容器の蓋を用意すると、それを皿にし作ったものを並べて「ロールケーキさんみたい。」と嬉しそうに言い、周りの子も「ほんまや。お店やさんや。」とロールケーキをできるだけきれいに並べようとしていた。共通のイメージをもつことができるように「お店やさんには何があるのかな？」と具体的に尋ねたり、一緒に考えたりできるようにした。「看板作ったら、お店やさんって分かるやん。」「食べるころもほしい。」「コロナやからお持ち帰りもほしい。」など自分の気づいた事を友達に伝え、お店の开店準備を始めていた。「これ、広げるからそっち持って。」とテーブルクロスを協力して広げたり、ビールケースとウレタン板で高さを合わせて食べる所の机をセッティングしたりしていた。

用意したコックタイを着けて「いらっしやいませ。」と言うが、お客さんが来てくれない。「お客さん、どうすればきてくれるかな。」と問いかけると、夏にしたライブごっこでチケットを渡すとお客さんが来てくれた経験から、「チケット作ろう。」と言い、周りの子も「あ、そうしよう。」とアイデアを出し遊びを進めていた。

画用紙とマジックを用意し、作ったチケットを配ると次々にお客さんが来てくれた。初めは売り手と買い手の言葉のやりとりが少なく、買い手が「これ。」と言って持って行ってしまふ姿が見られた。「お店の人って、どんな風に言ってくれるかな？」と売り手と買い手の会話が成り立つ方法を考えられるようにした。「お待たせしましたって言って運んだらいい。」と売り手が買ったものをトレーにのせて運び、「座ってお待ちください。」「お待たせしました、どうぞ。」などと言い、ロールケーキを運んでいた。チケットを渡した他クラスの友達も買いに来てくれるようになり、「お持ち帰りの袋もほしい。」と保育者に言いに来たり、家からナイロン袋や紙袋を持ってきたりして、翌日にお店やさんが始まることに期待を膨らませるようになっていった。

<評価>

- ・こんなお店にしたいという子どものイメージを大切にしながら、実現できるように考えたり、アイデアを出したりする姿に共感していくようにした。また、アイデアを出し合い、

友達と伝え合うことで相手の思いに気づき受け入れたり、共感したりすることを体験することができた。お店にあるものや店員さんが言っていたことなどを思い出せるような言葉がけから、こんなものがあつたらよりお店みたいになるなど、次につながる関わりをしていくことで、イメージが形になっていくおもしろさを共有し、遊びを十分に楽しめるようになった。

【5歳児】9月 「かわいくしてあげる！」

ねらい：友達とイメージを共有し考えを出し合いながら、意欲的に遊びを進める。

これまでの経験を活かし、素材や用具の特性を理解し、工夫して遊びに取り入れる。

1学期から、スズランテープで三つ編みを作る遊びを繰り返す中で、自分や保育者の髪の毛を編んで遊ぶようになった。姿見鏡とタオルを用意しておく、子どもたち自ら机やイスを運び、「先生かわいくしてあげる！」と保育者を座らせ、タオルを巻いてヘアアレンジを始めたり、洗濯ばさみを探してきて、タオルを留めたりして、美容院ごっこが始まった。

「先生、ブラシとハサミがいる」と言いつつ作る中で、ハサミの構造に気付き2つのパーツに分けて作るようとしていた。実際に動くハサミをつくれるように厚紙と割りピンを用意し、割りピンは子どもから声が挙がるまではあえて出さずにいた。すると、A児が「あれ欲しいな、時計作った時に使ったやつ」と言うと、B児が「割りピン！」と言い、他児も「あれやったら動かせる」と賛同し、「先生、割りピン下さい」と、保育者のところに来たので、割りピンを必要な数を確認しながら手渡し、危険のないように見守りながら一緒に作った。

櫛やハサミを作り、霧吹きを用意して美容院ごっこを始める中で、C児がウエストポーチを作って腰につける。保育者が「良いね、これは何に使うの？」と声をかけると、「ハサミ入れるねん。前に散髪屋さん行った時に着けてはったもん。」と言う。それを見た他児は「どうやって作ったん？」と聞き、続々とウエストポーチを作り、マイ櫛・ハサミを入れる。

その後も美容院ごっこを進める中でさらにイメージが膨らみ、シャワーやドライヤーもつくって、髪を洗い始めた。「このままだと、髪切るところがビショビショになっちゃうね、どうする？」と問いかけ、同時に洗面器をそばに用意しておく、もう一台机を用意し、イスを逆向きに置き、机に頭をもたれられる形にして、洗面器を机の上に置き、その中に頭を入れて洗えるようにした。保育者は「本物の美容院みたいやね。お客さん、どうですか？」と声をかけて工夫して遊ぶ姿を認め、一緒に遊んだ。その後、カットとシャンプーの場所を使い分けたり、髪型の絵をかいた絵をバインダーに挟んだりして「こちらへどうぞ」「今日はどんな髪型にしますか？」とお客さんを誘導し、子ども自ら遊びを進めていった。

<評価>

- ・三つ編みを作ったり、保育者や友達の髪に触れたりして遊ぶ姿があつたが、保育者が姿見鏡を用意したことをきっかけに、一気にイメージが膨らみ、友達とイメージを共有して遊ぶことができた。保育者が一緒に遊びに参加しながら、アイデアのきっかけをつくったり、子どもの発想を聞き出したことで、必要なものについて自分で気付き、友達と意見を出し合い、友達のアイデアを認め同じものを作って一緒に遊ぶ姿につながった。
- ・割りピンや洗面器などは、子どもからの声や気付きを待ちたかったので、あえて先に出さずにいたが、5歳児としてこれまでに経験したことを活かして、さまざまな素材や用具を自ら選び、特性や使用方法を理解して、遊びに取り入れようとする姿が見られた。

## 5. 研究の成果

- 一見何気ないと思われるような瞬間も子どもにとっては大きく心が動かされるきっかけとなりうる。まだ言葉で思いを伝えきれない乳児期は特に、表情や仕草からしか心が動いた姿を読み取ることができないが、日頃から保育者がアンテナを張ってその瞬間や姿を見逃さないようにすることが大切だ。
- 事例から「子どもの心が動いた瞬間」を見取り研究していく中で、当初「心が動いた瞬間」だと思って見ていたものが、実際には、「心が動いた」「きっかけ」「瞬間」「子どもの姿」に細分化されることに気づいた。保育者が見取ることができるのは、心が動いた後の子どもの姿だけだが、その前には必ず心が動いた「きっかけ」や「瞬間」があることも明らかになった。心が動いた「子どもの姿」からさかのぼって保育を振り返る中で、心を動かした「きっかけ」や「瞬間」を探ることができ、子ども理解につながった。
- 心が動いた姿を捉えた上で、保育者が援助や環境を再構成することで、子どもはさらに遊び込み、十分楽しむことができる。乳児期に遊びを十分楽しむ経験を積み重ねる事が、幼児期の自ら遊びを展開していく力の土台となることを再確認し、職員間で共通理解することができた。

## 6. 今後の課題

- 今後も職員間で保育を振り返り、事例の検討を通して、実践・子どもの見取りについて共有する機会を増やしていきたい。
- 今回は通常の保育の中での事例を検討する方法を用いたが、園内公開保育研究会などの機会を利用して、保育者間で同じ保育の場面を切り取って研究する方法も取り入れていきたい。